

氏 名	ひ おき こう いち ろう 置 弘 一 郎
学位(専攻分野)	博 士 (経済学)
学位記番号	論 経 博 第 234 号
学位授与の日付	平 成 11 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	文明の装置としての企業

(主査)

論文調査委員 教授 赤岡 功 教授 近藤文男 教授 田尾雅夫

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、企業を文明論の視点から分析するものであり、各国地域の企業の異同、歴史的発展を、共時的に比較でき、通時的に理解できるとともに、企業行動の制御を考察しうる経営学を構築しようとする試みである。

論文の構成は5章からなり、序章と終章が付されている。序章では、関心の所在として、経営学の置かれた理論状況を述べる。経営学は企業経営を主たる分析対象としてきたが、その対象を分析する場合に、他の領域の方法を援用することが行われてきた。しかし、経営学の固有の対象を分析する視点から、新たな切り口を提供できる可能性を示唆している。

第1章「文明要素としての企業」では、文明と文化の概念を区分する。梅棹氏による「人間が自ら創り出したさまざまな装置群や制度群とともに形成する一つのシステム」としての文明と、「人間精神の内部にある価値の体系」としての文化の区分に基本的には依拠し、文明は要素に分離し、その要素を単独で受容できるのに対して、文化は高度にシステム化されているために、文化要素の単利は困難である点を指摘する。この区分に基づいて、現在の企業を構成する株式会社制度や大量生産方式がそれぞれ文明要素として考えられることが指摘される。どのような文明要素から企業システムを構築するかは、それぞれの社会によって異なる可能性が高い。この点に比較経営という理論領域が成立する基本的な枠組みが成立する。また、企業が生産する商品は文明要素そのものであることも多いが、その中にも文化的な部分が多く入り込んでいる文化商品と、あらゆる通文化的に浸透可能な文明商品が区分される。この枠組みが設定されることによって、企業を文明論からとらえる視点が用意される。

第2章「企業と家庭・自然との交換」においては、企業が、家庭・環境とどのような交換を行っているかを問題とする。自足経済の体系の中では、家庭が生活に必要な資材を生産していたが、家庭内生産は次第に外部によって生産が代替されるようになる。このプロセスを、ポラニーやイリイチ、バーンズらの先行研究における概念を用いながら、家庭内生産と外部の生産の関係を考える。そして、家庭での生産が、外部によって代替され、大規模生産化することが必ずしも効率につながらないとするこれらの論者の論点を進め、家庭による生産が外部に移行するのはコストによるもばかりでなく、家庭が利便に反応するためでもあるとする。つまり、家庭は自分で生産する能力があり、家庭内生産の方が低コストであっても利便を優先するために外部の商品を購入することが少なくないとする。さらに、外部生産に移行すると家庭内での生産技術が失われることを指摘し、家庭内での生産と外部生産の分担を考える必要があることを論じる。

第3章「交換の主体・交換の系」では、生産を巡る交換の系が論じられる。多くの場合、企業・家計・政府の三つのシステムを考えるが、それに対して、企業＝生産系、家庭＝生活系、自然＝環境系の三つの系の間での交換を考える。環境は、その内部でさまざまな物質＝エネルギーの循環系を持っており、そのために、人間の系としての企業系、生活系とのさまざまな交換において、人間の系から受け取ったものが環境系の中でさまざまな相互作用を引き起こし、結果としては当初の交換とは別のところでの三者の相互作用が生ずる。この環境系との交換を含めた三者交換で、現在ではほとんどの生産を企業が担っているが、産業化以前は家庭内で多くの生活の必需品が自足的に生産されていた。産業化はいわば家庭の生産が外部

に移行するプロセスであり、家庭は生産能力を失って次第に生産機能を企業に移管してきた。しかしなお家庭は家事サービスの生産主体であり、ほとんどの家事は外部生産が可能でありながら、家庭内で生産が持続している。また、企業と家庭の中間に位置づけられる生業が必ずしも非効率ではなく、むしろ生産の主体としての可能性と重要性を持つこともあることが指摘される。そして、環境系の反応などにより、これら三者の交換が、将来において変わる可能性を指摘している。

第4章「企業という文明要素の構成」では、株式会社制度・大量生産・多品種少量生産が論じられる。第1に、①同じように株式会社といっても、その性格が利益重視のアメリカと、経営参加のあるドイツと従業員の組織としての性格ももつ日本との違い、②現場のインテリジェンスを取り込む日本と、それに対して否認的なアメリカ等々、企業を構成する要素が文明によって異なることが明らかにされる。第2に、大量生産に対する多品種少量生産が文明要素として別のものであり、大量生産とは異なる生産の様式が成立していることを主張する点にある。大量生産に対する多品種少量生産は、これまで大量生産の様式の延長上に考えられてきたが、多品種少量生産は大規模生産であっても、生産の原理が大きく変化し、新たな文明要素を構成しているとする。この新たな文明要素が出現し、徐々に広がっていったのは、単に生産が大量に製造することや、効率を追求した結果ではなく、製品が多様性を持つことを要求する家庭＝生活系との関連において必要とされた結果であることが述べられ、生活によって規定された生産となる可能性を指摘する。

第5章「文明のゲーム」では、公文氏による現在の社会状況を19世紀国家に代表される威のゲームから富のゲームへの移行としてとらえ、さらにそれが智のゲームによって代替されるとする説明を企業の側からどのようにとらえるべきかについて論じている。企業は富のゲームのルールに引きずられ、富のゲームが致富のゲームへと転化している。生産によることなく、致富を目的としたゲームに問題があることはいままでもないが、生産についても単に生産それ自体を目的とするのではなく、生産が生活によって制御された生産であることを必要とするという。

終章「企業との共生」においては、この論文の結論として、社会の中で企業と生活・自然のそれぞれのシステムが共生できるコンテクストを生起することが必要であることを述べている。この領域を担当する理論領域として、経営学の役割を転換することの必要を主張する。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、第1に、企業を文明の装置として理解すること、そして、第2に、その企業が家庭と自然と相互に交換を行っているとして理解することによって、企業の役割、意味を歴史的発展の中で理解できるとともに、各国間での企業経営の変化と異同をも考察しうるものとしての、総合的な新しい経営学を構築しようとする野心的試みである。

本論文の第1の貢献は、企業と家庭と自然が交換関係にあると置くことによって、自給自足時代から産業社会をへて将来における、自然と人間の交換関係の中で一定の時期に社会における生産の役割を担うものとして企業が登場し、その役割をいかに果たしているかについて、企業の意味を各歴史段階で考察する枠組みを提示したことである。かつて自足経済では、家庭が生産も担っていたが、家庭生産が企業に代替され、今日では企業もつばら生産を担っていると通常は理解されている。しかし、現在でも、家庭内生産が行われており、生業などによる生産もかならずしも非効率的ではない。さらに、自然系からの反応により、利潤追求にむけた生産の限界に直面する場合もあり、家庭は消費、企業がほとんどの生産を担うという分担関係に変化が起こる可能性もある。こうした、企業の社会での意味にかかわって、企業の役割の変化、企業の意味を問うことのできる枠組みを経営学として提示した意味は大きい

とくに、従来、日本の経営学では、企業を歴史的存在とする強い見解が存在していたが、戦後管理論を中心とするアメリカ経営学が優勢となるに及び、1970年代も後半になると企業は歴史的に変化していく存在であるという理解は希薄になっていた。また、管理論として経営学を展開することが多くなったため、企業と他のシステムとの相互作用の全体を理解するという観点が弱くなってきている。こうした経営学の状況を考えるとき、新たな視点から企業を歴史的存在として、その変化を考察する枠組みを提示した本論文の貢献は大きいといえる。

第2の貢献は、本格的な比較経営学の可能な枠組みを提示したことである。最近では、国際経営論、比較経営学という領域が生まれてきているが、各国の文化の相違と企業経営の関係について、大きく収斂説と非収斂説に分かれており、収斂説では、各国の文化の相違が軽視される。これに対して、非収斂説では、文化の違いは考慮されるが、文化により企業は異な

るとされ、それ以上の研究の有効な発展がなされにくい。このとき、人間の作り出した装置や制度を文明とし、人間精神の内部にある価値の体系を文化とする梅棹氏による文明と文化の区分に依拠して、企業を文明の装置とおくことによって、本格的な比較経営学が可能な枠組みが提示される。

文明の要素である企業は、各国に浸透する。その時、それは各国の文化により変容されて受容される。しかし、受容されて活動を続けることによって、文化を変化させることにもなる。こうして、文化の相違を認め、文化により規定されながら文化を変容させるなかで各国の企業経営を比較しうる枠組みを提示し、比較経営学の展開にひとつの道を開いたことはこの論文の貢献であるといえる。

第3に、本論文は、第1の貢献でのべた企業の歴史的理解と、第2の各国企業の比較を踏まえ、①企業を文明の装置として理解すること、②自然、家庭、企業間の交換に注目することによって、歴史の発展の中で企業を理解するとともに、各国間での企業経営を比較でき、単に経営管理にとどまらない経営学を構築する新しい枠組みを提示して、経営学原理の展開に新たな方向を示したことが大きな貢献である。日本の経営学においては、企業の社会における活動を明らかにする経営学原理と企業の目的達成にむけた管理を研究する管理論と大きく2分する立場と、経営学とはすなわち管理論であるとする立場とがあるが、最近では管理論を経営学とする立場が優勢となっている。しかし、管理論のみでは、企業と社会との関係を十分扱えないために、管理論とは別にそれを補完する形で企業倫理、企業の社会的責任論等々がおりにふれ論じられてきた。このことは、管理論にとどまらない経営学の展開が要請されていることを示しており、経営学原理の必要性を示すものといえるが、こうした要請に対して、本論文は自然、家庭、企業の交換のなかで、家庭の要請により大量生産から多品種少量生産への移行がおこり、自然系の反応と家庭の要請、企業の行動というリンクが描かれること、および家庭での生産や生業が意味を持ちうることを示すことにより、社会的責任論が扱う領域等を含めて、新たな経営学原理の体系が提示されることになっている。これが、本論文の最大の貢献である。

しかし、本論文には、問題点もある。第1に、自然、家庭、企業の交換のなかで企業の意味を歴史的に問い、また、文明の装置として企業経営を理解することにより、比較経営学展開の枠組みが示され、さらに、これらをあわせた上で、経営学原理の新たな展開の道を提示したとはいえ、それらは荒削りであり、具体的展開には不十分な点がある。

第2に、経営学の総合的な新たな展開を行うのに、この論文は、5章「文明のゲーム」で公文俊平氏の「威のゲーム」「富のゲーム」「智のゲーム」を紹介した上で、富のゲームをさらに、生産のゲームと致富のゲーム分け、このゲームがコンテキストフリーで行われる場合に発生する問題点を指摘している。今日の情報化の進展をみると、この章の重要な意味は認められる。しかし、もし、総合的な経営学を構築するのであれば、ゲームについて述べるのであれば、このゲームを含めると、比較経営学、また、経営学原理の枠組みおよびその具体的展開はどうか示されるべきである。この点からすれば、この第5章「文明のゲーム」は、第4章の前におかれ、これを含めて、文明の中で企業が如何に行動しているかを論ずべきであろう。

このように、本論文には問題点がないとはいえない。しかしながら、上でみた本論文の経営学に対する貢献はまことに大きく、その展開は多くの期待を集めるものであり、ここで指摘した問題点によって、その価値が低められるものではない。

よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、平成11年2月2日論文内容と、それに関連した試問を行った結果合格と認めた。